大切にしていること――帰れる場所

保育士として働く卒業生たちが本校を訪れて懇談会を行います。（上）本校３階にある図書室。（下）各学科の専門書籍に加えて、「心の教育」に関する書籍も充実させています。2012（平成24）年からはふたりの司書が常駐。卒業生が訪れて文献にあたる姿もしばしば見られます。

母船のような存在に

理学療法学科のアドバイザーであった嶋田智明教授が、開校時、本校の未来像を「母船」と例えたことがあります。

「学生と学校との関係は、卒業で終わりではない。学校は、海原へ漕ぎ出た卒業生たちが、いつでも戻って来ることのできる船のような場所であってほしいと思っています。同時に、卒業生たちには、教員・講師とともに在校生を支える力になってほしい」。

今日、本校は、少しずつですがそうした存在になることができつつあるようです。仕事の後や休日に本校を訪れる卒業生も少なくありません。

共感・共鳴する姿勢が支える

例えば、理学療法士として仕事をしていると、臨床疑問、学会発表、学術大会の研究報告などに取り組む機会があり、卒業生たちは質問や相談をもって教員を訪ねたり、図書室を利用したりすることがあります。

また、就職したての時期に、介護福祉・保育の現場で時間に追われる日々を送る卒業生たちは、それぞれが悩みを抱えたまま走っています。その悩みを、在学時に2～3年間という時期を共に過ごし、自分の多くを理解してくれている教員に話すことで、気持ちが整理される部分は多々あるでしょう。別の卒業生のことを「あの子もこうして頑張っているよ」「あなたが活躍していることを話しておくね」と伝え、同期の仲間を意識させることで、勇気が出ることも少なくないようです。

4学科の先にあるのは、いずれも答えの出ない仕事です。こうであれば正解、こうであれば不正解、という明確な着地点のない世界で、対象とする一人ひとりにとっての〝正解〟を共に見つけることをめざしていく仕事には、共感・共鳴する存在がとても大切だと考えています。

助け合う関係で

一方で、本校には、卒業生たちに助けられている部分が多くあります。本校では、研修会、勉強会、講習会といった催しがたびたび実施されます。この際に、卒業生たちに声をかけ、運営のサポートを頼むことがしばしばあるのです。

また、理学療法学科の卒業生によるチューター制度に加え、他学科でも、「ハーベストタイム」という時間を設け、卒業生と在校生の交流授業を行っています。

2013（平成25）年には、念願だった同窓会が設立されました。卒業生たちとの交流を通して、本校も社会や現場のニーズに敏感な姿勢を保ちたいと考えています。

本校は、他者のために行動し、他者を喜ばせることを自分の喜びと捉えることのできる心を大切に育みたいと考えています。だからこそ、誰かの役に立ちたいと学生たちが考える「誰か」に該当する存在に、本校自身がなりたいと思っているのです。